



Title	Germaine de Staël et son héritage romantique : enthousiasme et correspondances
Author(s)	植村, 実江
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96168
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名	(植 村 実 江)
論文題名	Germaine de Staël et son héritage romantique : enthousiasme et correspondances (ジェルメーン・ド・スタールとそのロマン主義の遺産 — « enthousiasme »と« correspondances »—)
論文内容の要旨 「スタール夫人のロマン主義理論、とくに詩学および詩人の役目における神秘主義的概念は、19世紀を通じて万物照応理論 (les théories sur les correspondances) に影響を与え、シャルル・ボードレール (1821-1867) に至る」。パレイエのこの指摘があるにも関わらず、ジェルメーン・ド・スタール (1766-1817) の研究者のあいだで、ボードレールの万物照応理論におけるスタールの影響に照準を定めた考察は、なされていないようである。一方、ボードレールの研究者である横張は、ボードレールのロマン主義論は、スタールの『ドイツ論』に多くを負っていると指摘している。スタールの « enthousiasme » は『ドイツ論』(1810) 全体を支配するテーマとみなされているが、この概念が « l'harmonie universelle (宇宙あるいは世界調和) » と同義であることに注目すると、« enthousiasme » と « correspondances » との接点が浮かび上がる。このような問題意識のもと、本論では以下の章立てに従って、スタールのロマン主義理論がボードレールへと波及している具体的な事例を検証し、両者の関係という観点からロマン主義の一面を提示することをめざす。 第一章「メランコリーと夢想」では、スタールのロマン主義理論において強調される「メランコリー」と、同じ文脈で語られることの多い「夢想」について考察する。「メランコリー」は古くから存在するが、スタールやシャトブリアン(1768-1848)は「近代のメランコリー」が存在するを感じていた。ヒポクラテス (?-前491/前490) においては黒胆汁を意味し、それが引き起こす心気症をもメランコリーと呼んでいたが、17世紀の文学では、メランコリーが「甘美」な感覚を喚起するものであることが確認できる。メランコリックな感情をもつ人間は、孤独、そして自然のなかで夢想する。ここで論者は、メランコリックな魂が夢想の状態のなかで覚える甘美な感覚が、メランコリーそのものと結びつけられるようになったと仮説をたてる。夢想の語源を調べると、「さまよう」の意味があったことがわかる。ルソー (1712-1778) やスタールの「夢想」から、自然のなかを散歩する夢想者のイメージが浮かび上がるが、散歩は、想念をさまよわせるという人間の内面の動きを外面化したものと考えられる。 第二章では、スタールのロマン主義理論の鍵概念であり、『ドイツ論』に通底するテーマである « enthousiasme » について考察する。『ドイツ論』において « enthousiasme » として打ち出される概念を表すために、スタールはしばしばほかの表現を使っている。『文学論』(1800)で語られる「魂の高揚 (l'élévation de l'âme)」もそのひとつである。『文学論』においてスタールは、英国の描写詩を「メランコリックな詩」と定義し、メランコリックな感情をもつ人間が自然のなかで覚える「魂の高揚」を描いている。この感覚を表す「振動」あるいは「つねにひとつの同じ感覚」も、« enthousiasme » の表現であると考えられる。スタールの « enthousiasme » の描写には「振動」と「上昇」の特徴があり、これらには新プラトン主義の思想が垣間見える。前者は天上の神と己のなかの神の共鳴、後者は、一者から流出した人間が「観想 (contemplation)」によって階層をさかのぼり、一者との「合一」をめざすという思想につながる。『文学論』ののちに「ドイツ」について研究したスタールは、『ドイツ論』においては「ロマンティックな詩 (la poésie romantique)」を称揚するが、この詩学においても、自然の美に喚起される「魂の高揚」の思想が根底に流れている。以上のことから「ロマンティックな詩」は「メランコリックな詩」が発展したのと考えられる。『ドイツ論』では、「哲学」、「宗教」、「詩」の融合をめざすスタールの態度が示されており、« enthousiasme » は、このようなスタールの思想を凝縮したものであるといえる。 第三章「オシアンと北の詩人たち」では、『文学論』で示された「北の文学」の理論が、小説『コリンヌあるいはイタリア』(以下『コリンヌ』) (1807) のなかでどのように実践されているか検証する。『コリンヌ』における竖琴とハーブの対比は、「ホメロスとオシアン」、つまり「南の文学と北の文学」の対比を表している。この観点から『コリンヌ』におけるハーブの描写に注目すると、『コリンヌ』におけるオシアンの重要性が明らかになる。オシア	

ンのモチーフは、「民族性」「聴覚の重視」を強調しており、この背景にはドイツの作家、ヘルダー（1744-1803）とゲーテ（1749-1832）の影響が考えられる。次に、18世紀の英国における「墓場派の詩人」を視野に入れつつ、トポスとしての「墓場」に注目する。『コリンヌ』において、オズワルドの人物造形には「メランコリックな青年像」が投影される。彼が墓場に迷い込む描写において、墓場は、現世の人間が死者と出会う場、つまり現世と来世の融合の場として描かれている。

第四章では、19世紀のフランスを代表する画家ウージェーヌ・ドラクロワ（1798-1863）におけるスタールの影響について考察する。ボードレールはロマン主義を現代の芸術とみなし、その代表者としてドラクロワを称揚する。すなわち、ボードレールのロマン主義観を探るには、彼のドラクロワ評を検証することが不可欠であるが、それだけではない。ドラクロワは有名な『日記』をはじめ、『両世界評論』誌などに掲載された評論を残している。これらのなかには、スタールに関する言及のほか、スタールの作品を筆写したものもあり、彼の著作からスタールの影響を探る手掛かりは少なくない。絵画の表現力を追求したドラクロワは、諸芸術の表現の差異について考え続けた。彼は、芸術論の側面をもつ『コリンヌ』を愛読し、スタールの音楽の称揚に共感した。音楽のもつ、魂に直接訴える神秘的な力を、ドラクロワは「*vague*（空漠、曖昧性、抽象性）」と表現する。「色、光、影」、これら絵画の特質によって「*vague*」を表現できると考えたドラクロワは、これらを絵画の最大の武器とみなした。絵画は音楽と同様に「*vague*」を表現できると考えたドラクロワは、それを文学に対する絵画の優越性の根拠とした。絵画と文学の比較へのこだわりには、ドラクロワが1818年頃にその講義を受けた、ヴィクトル・クーザン（1792-1867）の美学的学説の影響が考えられる。クーザンは二人と違い、詩を第一の芸術と位置づけた。詩は心へと同様、精神にも語りかけることができるからである。言語を介さず直接魂に訴えるという音楽の神秘的な力は、「*enthousiasme*」を喚起する。「己のなかの神と天上の神との共鳴」である「*enthousiasme*」を、物理的に空気の振動である音楽は、他の芸術分野と比べても引き起こしやすいと論者は考える。ドラクロワが目指した絵画の理想は、絵画の美と鑑賞者の間に築かれる「神秘的な橋（*un pont mystérieux*）」というイメージに表現されている。

第五章では、ボードレールの万物照応およびロマン主義論について考察する。ボードレールは『1846年のサロン』において「ロマン主義とは何か」という問いをたて、「北と南」の図式を用いるが、北の景色が陰鬱であるからこそ、彼らの絵画は色彩豊かであるとし、北と色彩を結びつける。「風景」の詩における室外の冬と内面の春の対比は、みずから色鮮やかな春を創造する、詩人の想像力の賛美となっている。

スタールとボードレールはともに、天と地の統一、すなわち精神世界と物質世界の統一を唱えている。夜と昼の対比は精神世界と物質世界の対比を表し、「二重の部屋」で描かれる日没時の青色と薔薇色の混ざり合いは、ふたつの世界が混ざり合った状態を表す。この状態は、「*vague*」を喚起し、精神世界へと誘われる夢想者が描かれる。一時的な永遠である夢想の世界にひたる夢想者は、ドアのノックの音により、突如として時間に支配される現実へと引き戻される。ボードレールはロマン主義のテーマである夢想到現代性を織り交ぜている。すなわち、永遠と時間という対立を描きながら、現代の夢想到の難しさを訴えている。

「万物照応（*Correspondances*）」の詩は、ふたつの照応、すなわち垂直の照応（天と地の照応）と水平の照応（共感覚）を描いているとされている。この詩でボードレールが語る共感覚の要素「色、音、香り」は、『1846年のサロン』（1846）にも見られるが、そこでは、共感覚が宗教的な感情を喚起することが示される。「色、音、香り」の性質である、明確な境界がなく、拡がりを持ち、無限を想起するという性質は「*vague*」と結びつくといえるだろう。『1846年のサロン』における落日の描写では、色の洪水と、音の洪水のイメージが互いに重なるようすが描かれる。色の感覚は音の感覚と共鳴し、色は「讃美歌」となって聞こえてくる。「讃美歌」の語は、色と音の共感覚が宗教的な感情を想起させることを意味し、ボードレールが共感覚に神との一体化を見出したことが示されている。色、音、香りという三要素は、とくに感覚の共鳴を引き起こす要因となり、垂直の照応、すなわち魂と天上の共鳴を促す。万物照応は水平方向、垂直方向という二つの別のものではなく、これらが融合し、ひとつになったところで、共鳴の感覚が増幅されることが示されている。また、ボードレールは、芸術に目的を持ち込もうとすると、芸術の美を損ねると主張しているが、同じ趣旨の記述を『ドイツ論』にも見出すことができる。この議論のなかで、スタールは芸術の美が喚起するメランコリックな感情を描いているが、ボードレールは現代の美とメランコリーを結びつけており、両者の美学の共通性がうかがわれる。

スタールとボードレールの両者に見られる物質世界と精神世界の統一というテーマは、精神と物質の対立における精神の優位へと帰着する。人間が精神的な存在であることや、人間の不滅性を知ることが、人間を崇高な存在にする。ボードレールの「低俗（*vulgarité*）」への軽蔑は、崇高への希求と表裏一体となっている。「*Enthousiasme*」と「*correspondances*」はともに人間が精神的な存在であることを説き、不滅を信仰する思想である。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (植 村 実 江)				
	(職) 氏 名			
論文審査担当者	主 査	大阪大学	教授	山上浩嗣
	副 査	大阪大学	教授	山田雄三
	副 査	大阪大学	准教授	平光文乃
	副 査	大阪大学	特任准教授	Éric AVOCAT
論文審査の結果の要旨				
以下、本文別紙				

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： Germaine de Staël et son héritage romantique : enthousiasme et correspondances

学位申請者 植村実江

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	山上浩嗣
副査	大阪大学教授	山田雄三
副査	大阪大学准教授	平光文乃
副査	大阪大学特任准教授	Éric AVOCAT

【論文内容の要旨】

本論文は、ジェルメヌ・ド・スタール（スタール夫人）の『文学論』（初版 1800 年）および『ドイツ論』（1813-1814 年）の分析から出発し、それらが提示する理想の文学の観念がいかなるものであるかを明らかにし、またその内容から、スタールの文学観がのちのロマン主義の先駆となりえたことを、とりわけスタールからドラクロワおよびボードレールへの影響関係に注目することを通じて論証する試みである。5 章からなる 142 頁の論文で、執筆言語はフランス語である。

第 1 章「メランコリーと夢想」では、スタールが『文学論』で主張する「北の文学」の優位性の根拠となる「メランコリー」の概念について検討し、ルソーやスキュデリーの作品も参照しながら、それが「散歩」という規則的な身体的動作を通じてロマン主義文学作品の源である「夢想」を生じさせるという連関を明らかにする。

第 2 章「Enthousiasme（宗教的熱情）」では、スタールの美学思想において重要な位置を占める enthousiasme の概念について検討し、それが、メランコリックな魂が夢のなかで覚える天上の神との一体化の感覚を意味すると同時に、『ドイツ論』において論じられる「普遍的調和 harmonie universelle」にも通底することを論証する。

第 3 章「オシアンと北の詩人たち」では、スタールが「北の文学」の源流とみなした「オシアン」（スコットランドの伝説的英雄詩人およびその作品集）の重要性とその特徴（とりわけメランコリーや enthousiasme との結びつき）について、スタール『コリンヌあるいはイタリア』（以下『コリンヌ』）ならびに『文学論』におけるオシアン像の分析によって明示する。また、そのようなオシアン像と、スタールが影響を受けたイギリス詩人たち（「墓場派」や「自然派」）に共通する内面的で悲観的な精神性についても論及し、その特徴が『コリンヌ』の登場人物であるオズワルドに現れていると指摘する。

第 4 章「ウジェーヌ・ドラクロワの芸術論におけるスタールの影響」では、『コリンヌ』を愛読したドラクロワの『日記』におけるスタールの芸術観の影響について、とりわけドラクロワが重視する「vague（抽象性、曖昧さ）」の概念に注目して論じる。その際とりわけ、スタールが音楽に特有であると認めた、知性や言語を介さず魂に直接働きかけるという特性（すなわち vague）を、ドラクロワは絵画にも同様に認め、他の諸芸術をしのぐ特権であると表明している点を指摘する。あわせて、スタールとドラクロワの両者に影響を与えた、同時代の哲学者ヴィクトル・クーザンの神秘思想についても概観する。

第 5 章「enthousiasme から correspondances（万物照応）へ」では、ボードレールの「風景」「二重の部屋」「万物照応」という 3 篇の詩を詳細に検討し、そこに見出されるスタールのロマン主義的理想と共通する要素について考察する。とりわけ、スタールが描く「地から天へ捧げる香」としての「enthousiasme」は、ボードレールが描く、共感覚を通して人間と天上の神とが共鳴するエクスタシスとしての「万物照応」との連関を明示する。最後に、芸術の目的が道徳性とは無縁であるというボードレールの考え（「芸術のための芸術」）が『ドイツ論』におけるスタールの思想を継承し、それが同様にドラクロワにも影響を与えたことを指摘している。

【論文審査の結果の要旨】

ボードレールに影響を与えたロマン主義の芸術家としては、通常第一にシャトーブリアンが挙げられる（ボードレール自身がシャトーブリアンを「ロマン主義の流派の始祖」とみなしている）。植村氏は、そのような通念を批判し、精緻な文献の考証を通じて、スタールの唱道する「北の文学」のロマン主義的要素（メランコリー、

夢想、内面性、enthousiasme) の内実を明確にした上で、スタールの文学観をボードレー尔につながるロマン主義の源と位置づけようとする。このような野心的な試みが、正当な方法によって説得的に遂行されている。とりわけ、①スタールにおけるメランコリーがルソー的な「散歩」という身体運動によって喚起されること、②神との一体化を感知させる enthousiasme を主題とした詩がロマン主義の詩の原型であること、③「オシアン」のスタール文学への影響がとりわけ『コリヌス』の複数の場面によって明白であること、また、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』におけるオシアンへの言及がスタールに影響を与えたこと、④人間の苦悩という内面を主題とする北の文学の特性が、創作者個人の独自の美的感性を表出する後代の詩人に受け継がれたこと、⑤ボードレー尔の詩や芸術観のなかに、スタールからの影響の痕跡が数多く認められること、を指摘し論証した点は、本論文の大きな貢献であると評価できる。また、ジェイムズ・トムソン、サミュエル・ジョンソン、ミルトン、トーマス・グレイなどのイギリスの詩人、ヘルダーやゲーテなどのドイツ人作家、ライプニッツ、ヴィクトル・クーザンの哲学やネオプラトニズム、ドラクロワやアングルなどの画家、木村敏や中井久夫の論説文にも言及するなど、筆者の広汎な領域への知識と関心がうかがわれる点も本論の長所である。論述はおおむね簡潔かつ明晰であり、フランス語も正確である。

ただし、本論文には次のような瑕疵も認められる。①当時のフランスならびに英国（イングランド、スコットランド）の歴史的な背景についての考察が不十分な点、②enthousiasme を「神との合一」への希求とみなす際に、スタールやボードレー尔のどのような宗教観が背景にあるのかについて十分に検討されていない点、④スタールからドラクロワやボードレー尔への思想的影響関係を論じる際に、それを裏付けるテキスト上の連関が十分に明示されていない点、⑤enthousiasme の政治的側面について論究がなされていない点、である。

とはいえ、これらは本論文がスタール研究ならびにフランス・ロマン主義研究の分野において達成した画期的な成果を損なうものではない。以上の課題の解決を通じて、植村氏がさらに研究を発展させることが期待される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。